

『周防内侍集』注釈（1）

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-05-20 キーワード: 作成者: 大野, 順子, On, Junko メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24517/00061957 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『周防内侍集』注釈(一)

Commentaries of "Suou no naishi shu" (1)

大野 順子

Junko ONO

【凡例】

- 一、本稿は、『周防内侍集』の注釈を行ったものである。
- 一、整理本文、【底本】【他出】【通釈】【本歌】【参考歌】【語釈】【補説】の順に項目を立てた。和歌には通し番号を付した。
- 一、最初にあげた整理本文は、読解の便宜のため、漢字・仮名遣い、清濁の表記、句読点、かぎ括弧など、私意により整理した。
- 一、【底本】には、冷泉家時雨亭叢書第一四巻『平安私家集 一』所収の『周防内侍集』を翻字した。漢字・仮名の別、仮名遣いなどは底本のままとした。
- 一、【他出】にあげた和歌の本文と歌番号は『新編国歌大観』により、表記等は私に改めた。これらの和歌本文が『周防内侍集』底本と異なる場合には、その句に傍線を付した。
- 一、【通釈】は、できるかぎり和歌本文に沿って訳しているが、本文に直接書かれていない内容については()のなかに補った。
- 一、【参考歌】は、作者が参考としたとみられる歌や、当該歌を解説するにあたって参考となる歌をあげて数字を付した。これらのうち特に重要な歌については、数字は白抜き数字で示した。詞書は特

に必要なもののみ掲出している。

- 一、【他出】【本歌】【参考歌】【語釈】【補説】にあげた和歌の本文と歌番号は『新編国歌大観』によった。これに収められていない歌は『新編私家集大成』、『平安朝歌合大成 増補新訂』、『日本歌学大系』等によった。漢字・仮名遣い、清濁の表記、句読点、かぎ括弧など、私意によつて表記した。
- 一、【本歌】【他出】【補説】等に、特記事項がない場合には省いた。

正月一日、堀河内裏にて、南殿の御前の山のけしき春めき
て見ゆるに、雨少し降る

- 1 春雨の今日ふりそむるかひありて山のけしきぞうす緑なる

【底本】

正月一日堀河内裏にて南殿のおまへの山のけしき春めきてみ
ゆるにあめすこしふる

春さめのけふよりそむるかひありて山のけしきそうすみとりなる

【他出】

○『万代和歌集』春上・一六一

春雨を 周防内侍

春雨の今日ふりそむるかひありて山の梢ぞうす緑なる

【通釈】

一月一日、(里内裏の)堀河院で、紫宸殿の御前の山のようにすが
春めいて見えるときに、雨が少し降る。

春雨が(元旦の)今日から降りはじめのおかげで、山のようにすは薄
い緑色ですよ。

【参考歌】

①我がせこが衣はる雨降るごとに野辺の緑ぞ色まさりける

(古今集・春上・二五・紀貫之)

②めづらしく今日降りそむる初雪に網代の氷魚も心よりけり

(伊勢大輔集・五二)

③いつしかと今日降りそむる春雨に色づきわたる野辺の若草

(新勅撰集・春上・六・京極前関白家肥後)

④雪もみな降るかひありて積もればや白雲かかる山となるらん

(高陽院七番歌合・雪・四七・周防内侍)

⑤春霞立ちにけらしな小塩山小松が原のうす緑なる

(続後撰集・春上・三五・藤原俊成)

⑥梓弓おしてはる雨ふる里の御垣が原ぞうす緑なる

(千五百番歌合・春二・一九二・藤原家隆)

【語釈】

○正月一日、堀河内裏にて：一月一日、里内裏である堀河院で。五
九番歌詞書の「三条のうちにて」と同じく、堀河院を里内裏として
用いていたことを示す。堀河院は「二条南堀川東、南北二町」(『拾
芥抄』)にあった藤原基経の邸宅のこと。承暦四年(一〇八〇)五月
一日に、白河天皇の里内裏として新造され(『水左記』・『帥記』の

同日条)、以降、白河天皇と堀河天皇の里内裏として使用された。嘉
保元年(一〇九四)に焼亡し、長治元年(一一〇四)に堀河天皇中
宮篤子内親王の御所として再建。堀河院のあるじとして最も長く時
を過ごしたのは、応徳三年(一〇八六)にここで受禪した堀河天皇
であるが、そのことから本詠を堀河天皇の御代のもものと断ずること
は難しい。○南殿の御前の山：紫宸殿の御前から見える山。「南殿」
は、南向きに作られる殿舎や紫宸殿のこと。本詠では、堀河院にお
ける紫宸殿を指す。○春雨の：春雨が。春雨が降るたびに野辺の緑
が色を増すと①に詠まれているように、春雨は草木の成長を促すも
のであった。本詠でも、元旦に降った春雨によって、山が薄緑に染
まるようすが詠まれている。○今日ふりそむる：正月元旦の今日か
ら降りはじめ。②は、今日から降りはじめた雪で白く染まった景
色の目新しさを歌っている。また、周防内侍と同時代に活躍した肥
後の③は、内容・表現ともに本詠と近い。「染むる」は「うす緑」の
縁語。○かひありて：おかげで。「甲斐」は、効果や効き目のこと。
春雨が降ったおかげで、山に緑が萌え出でたとする。また、「峽」は
「山」の縁語。周防内侍は④でも「かひありて」を用い、縁語を織
りこみつつ、山の色彩の変化を歌う。○山のけしきぞうす緑なる：
山のようにすは薄緑色ですよ。「うす緑なる」は、松の緑が霞のために
薄く見えることが詠まれた⑤あたりから、新古今歌人にしばしば用
いられるようになる。のちに、春雨よって植物が萌え出でたことで
御垣が原が「うす緑」になると⑥で詠じられた。本詠第四句は、家
集では「山のけしきぞ」と詠ずることで遠景を眺めやっているのに
対し、『万代和歌集』では「山の梢ぞ」と作中人物を春雨が降りだし
た山の峽のただ中に据え、ふり仰いだ視線の先にほんのりと緑が芽
吹いた枝先を見いだす近景へと詠みかえている。

【補説】

『周防内侍集』の巻頭歌は元旦の詠。ここから一番まで、ほぼ

時系列に従って春歌が並ぶ。ただし、一〜一四番歌まで歌合の歌が続いた後で夏歌へと移る構成を取っているので、春歌としてのまとまりは一〇番までとみるべきか。

内裏の南殿で主上のおそばに控えていたときの詠が、家集の口開けとなった。本詠より家集が始まることから、「掌侍」という立場が周防内侍のなかで大きなウエイトを占めていたと考えられる。

七日、二位の御局より

2 数しらず重なる年を鶯の声きくかたの若菜ともがな

【底本】

七日二位の御つほねより

かすしらすかさなるとしをうくひすのこゑきくかたのわかかなともがな

【他出】

○『後拾遺集』春上・三七

正月七日、周防内侍のもとへ遣はしける 藤三位

数しらず重なる年を鶯の声するかたの若菜ともがな

○『難後拾遺抄』・七

正月七日、周防内侍が許につかはしける

数しらず重なる年を鶯の声するかたの若菜ともがな

貫之が歌に

摘みたむることのかたきは鶯の声するかたの若菜なりけり

とよめるは、若菜摘みに野に出でたるに、鶯の声するかたを聞くほどに、若菜なむ摘みためぬとあるこそいふにもあれ。ここにかれをとりて「声するかた」とよみたるが、さるべしとおぼえぬなり。かの歌を本歌にてよみ

(たるはかかるイ)
たりける歌あらんや。

○『奥義抄』後拾遺・春・二〇〇

数しらず重なる年を鶯の声するかたの若菜ともがな

これは、拾遺に「摘みたむることのかたきは鶯の声するかたの若菜なりけり」といふ歌を思ひてよめるなり

○『宝物集』・四四二

数しらず重なる年を鶯の声するかたの若菜ともがな

【通釈】

(一月) 七日、二位の御局(親子)から

数え切れないほど重なる年を、鶯の声を耳にするあたりの(なかなか摘みためられない)若菜のようにしたいものですよ。

【本歌】

摘みたむることのかたきは鶯の声する野辺の若菜なりけり

(拾遺集・春・二六・よみ人しらす／拾遺抄・春・一九)

【参考歌】

①いつかわれ昔の人といはるべき重なる年を送り迎へて (山家集・五七七)

②人はみな野辺の小松を引きゆく今朝の若菜は雪やつむらん (後拾遺集・春上・三二・伊勢大輔)

③春の野の若菜ならねど君がため年の数をもつまんとぞ思ふ (拾遺集・賀・二八五・伊勢)

円融院の仰事にて、ふる歌奉りしに

いまさらに老いの袂に春日野の人笑へなる若菜つむかな

これをのちに御覧じて、又の年の七日に、白銀の籠に若菜などして、孫の少将を御使ひにて

④春日野に多くの年はつみつれど老いせぬものは若菜なりけり

(中務集・一七四／一七五)

【語釈】

○七日：一月七日。一、四番歌は正月の詠で、このうち若菜を詠じた二・三番は一月七日の贈答。詠作年次は不明。○二位の御局より：二位の御局から歌が送られてきた。「二位の御局」は藤原親子のこと。藤原親子（治安元年（一〇二一）～寛治七年（一〇九三））一月二日 七三歳）は、父は藤原親國、母が高階光衛女。東宮大進藤原隆経の妻で、子に顕季。藤原資業女や源定良女らとともに白河天皇の乳母となるも、ほかの乳母たちが早くに亡くなったため、白河天皇唯一の乳母として殊遇を得て従二位に昇った。寛治五年（一〇九一）一〇月一三日には、『従二位親子歌合』を主催。『後拾遺集』に二首入集。本詠は、親子が没する寛治七年以前の正月七日に詠まれた。○数しらず重なる年を：数え切れなくらい重なっていく年を。年月を重ねて老いていくことを詠む際に「重なる年」を用いるのは本詠以降。○鶯の声きくかたの若菜ともがな：鶯の声を耳にするあたりの若菜が「摘み溜むることのかたき」ものとされるのように、齢を積み重ねることなくいたい。「若菜」は、正月の初の子の日や、七日の白馬節会で食すために摘まれる野草として、和歌にしばしば詠まれる。『枕草子』には「七日、雪間の若菜摘み」とある。②は正月七日の子の日の詠で、今朝摘みに行った若菜に雪が積もっていると歌う。また、五条尚侍の算賀の歌である③は、若菜を「摘む」に年の数を「積む」を掛けて、長寿を言祝いでいる。「若菜」に「我が名」を掛けて、老いの身で古歌を奉る謙辞を述べた中務に對し、円融院の④は、いくとせ若菜を摘んでも若菜は老いることがないようにあなたの名も廃れることはないことと詠んでいて、年を「積む」と「若菜」を「摘む」ことを並立するものとする。これらに對して本詠は、なかなか手元に摘み溜めることができない若菜を詠んだ『拾遺集』二六番歌（異本系と『拾遺抄』の一部伝本は、第四句を「声するか

たの」とする）を本歌として、若菜を摘み溜められないように、年が積み重ならなければいいのに、と歌う。第四句「声きくかたの」が、『後拾遺集』で「声するかたの」なっているのは、二六番歌を下敷きとしたことを明示しようとしたものと考えられる。ただし、『難後拾遺』は直接二六番歌に学んだとすることに疑問を呈している。

【補説】

『周防内侍集』は、このほかにも親子との贈答歌（三七・三八番）を収める。また、子の顕季とも、親子の死を悼む贈答歌（四七・四八番）を詠みかわしたほかに、少なからぬ交流があった（四七・四八番、七八番、『六条修理大夫集』等）。白河天皇の近臣一家との交際は、掌侍をつとめる周防内侍にとって自然なことであった。

返し

3 年つめど三千代の数を数ふべき君はなほこそ若菜なりけれ

【底本】

返し

としつめとみちよのかすをかそ「ふ」へききみはなほこそわかかりけれ

【通釈】

（周防内侍の）返歌

年を重ねていますけれども、三千年（という長い年月を、この先で）数えていくはずのあなたは、やはり若菜（のようにお若い）ですよ。

【参考歌】

①年つめど同じさまなる若菜にも今日には似ずやあらんとすらん

（中務集・一七六）

②苦むさん三千代の数に包む石はいかなる宿の庭にかあるらん

（隆信集・三四二）

③植ゑし植ゑばつかの間もなくかる萱を三千代の数を数ふばかり

ぞ

(女四宮歌合・一八・菅原董宣)

④春日野に年はつめども老いせねば羨ましきは若菜なりけり

(前斎院撰津集・正月七日・三二)

【語釈】

○返し：周防内侍の返歌。○年つめども：あなたは年を重ねていますけれども。「年つめども」と「若菜」をあわせて詠ずるのは、「二番」【考歌】の④につづけて、さらに中務が詠じた①が現存最古例。周防内侍は、「多くの年はつみつれど老いせぬものは若菜」と歌った正月七日の円融院に発想を得て、つづく中務詠の初句を用いた。「摘め」は「若菜」の縁語。○三千代の数をかぞふべき君は：三千年という長い年月を数えていくはずのあなたは。「三千代」は、三千年、あるいは、非常に長い年月を指す。白河天皇の乳母として栄えている親子を、このまま末長く繁栄し続けるであろうと言祝ぐ。「三千代の数」と歌う例は少なく参考歌にあげた二首のみ。②では、幼子の将来を嘉し、石が苦むすくらしい長き年月を歌うところで、「三千代の数」が用いられている。植えるとすぐに刈ることになる刈萱もここでは三千年も生い茂っていきそうだとする③は、本詠と表現が近い。○なほこそ若菜なりけれ：やはり若菜のように若いですよ。第二・三句に歌われた長久を受けて、あなたの将来は遙か遠くまで続くのですから、これまで過ぎした年月など長いようにみえて短いのだと歌って、親子の長寿と若々しさへの祝意を含ませた。周防内侍とほぼ同時代に活躍する摂津の④でも、年を重ねても老いず、若々しい葉をつける若菜が羨ましいと、ここでも若菜に「若さ」を重ねている。

【補説】

「三千代の数を数ふべき」と、親子に期待される行く末が桁外れに長いことを示した上で、それに比べればこれまで積み重ねてきた年月など、まだ「若い」というほかないくらい短いものだ、と洒落てみせたところに本詠の面白味がある。

正月晦、大盤所の坪に雪の山つくらせ給へるに、人人歌詠むに

4 あめにのみ積もりし雪のいかにして雲ぬにかへる山となるらん

【底本】

正月晦大はんところのつほにゆきの山つくらせたまへるに人
くうたよむに

あめにのみつもりしゆきのいかにしてくもぬにかへる山となるらん

【他出】

○『続拾遺集』冬・四五八

大盤所の坪に雪の山つくられて侍りける朝、よみ侍りける
あだにのみ積もりし雪のいかにして雲ぬにかへる山となりけむ

【通釈】

正月末日、台盤所に面した中庭に(主上が)雪の山を作らせな
さつて、(御前に参上していた)人々が歌を詠んだときに。

(雲ぬとも呼ばれる)天にばかり積もっていた雪が、どうして雲ぬにかへる山となつているのでしょね。

【参考歌】

雪のいと降り積もりて侍りけるを、山のかたに作らせ給うけるに、うへの男ども歌つかうまつり侍りければ、よませ給ひける

①あめつちもうけたる年のしるしにや降る白雪も山となるらん

(続古今集・賀・一八八二・後朱雀院)

正月十日のほどに、御前に雪山をつくりて、藏人義綱、歌つかうまつれと仰せられければ

②降り積もる雪の山とはなりぬとも花とやみらむ春しきぬれば

(範永集・一八一)

雪のあした、宮の御前に、人人して雪山つくらせ給ふに、火
焚き屋のうへなる雪をみて、下野の君の言ひ出だしたりし

③いかでか積もるひたきやの雪

もと付けし

今朝みればかまどの山もかくやあらむ

(為仲集・八〇)

④雪もみな降るかひありて積もればや白雲かかる山となるらん

(高陽院七番歌合・雪・四七・周防内侍)

【語釈】

○正月晦、大盤所の坪に雪の山つくらせ給へるに…正月末日、台盤所に面した中庭に(主上が)雪の山を作らせなされたときに。「正月晦」が何年のことかは不明。「大盤所」(台盤所)は、台盤(＝食卓)を置く部屋のこと。宮中では清涼殿にあり、女房たちの詰め所にもなつた。初雪や大雪のときには、「初雪見参」・「大雪見参」(蔵人が下級官人の出勤状況を調べ、禄を給う)や、雪山づくりが行われた

(『河海抄』引用の「村上天皇御記」)。宮中で雪の山を作ることについては、定子と清少納言がいつまで雪山が消えずに残るか賭をした話(『枕草子』)や、『源氏物語』朝顔巻にかつて藤壺の御前で雪山を作ったことを思い起こす場面がみえるほか、①・②・③の詞書などにも残されている。周防内侍と同時代には、『讃岐典侍日記』や『殿

曆』嘉承元年(一一〇六)一二月三日条に、堀河天皇と中宮篤子が大内裏で雪山を作らせたことが見える。○あめにのみ積もりし雪の…空の上ばかりに積もっていた雪が。『続拾遺集』で用いられている「あだにのみ」は、『堀河百首』以前には用例が見えない句。下の句で、雲ぬ(＝宮中)に降った雪を掻き寄せて作った雪山を「雲ぬにかへる山」としているのが、初句としては、雪はそもそも空の上にあるのだとする「あめにのみ」が適當。『続拾遺集』は、「雲ぬ」との同心病を避けて「あめ」を「あだ」としたものか。○いかにして

雲ぬにかへる山となるらん…どうして「雲ぬ」にかえる山となつて
いるのでしょうか。「雲ぬ」には「大空」と「宮中」の意が掛けられ
ている。周防内侍は、雪は「あめ」(大空)に積もるものと初二句で
歌った上で、下の句で「雲ぬ」(大空)から降った雪が「雲ぬ」(宮
中)でまた山になつていようよ、と興じてみせた。これに対して『続
拾遺集』は、初句を「あだにのみ」としたことで、「天」から「雲ぬ」
に「かへる」と表現する必然性が失われたため、第四句を「雲ぬに
かかる」とした。この変更によつて、雪が「掛かる」(降りかかる)
と、「斯かり」の連体形をもちいた「かかる山」との掛詞となつてい
る。本詠と①は、雪山というテーマとともに結句も重なる点が注目
される。また、周防内侍は④でも「山となるらん」という表現を用
いて雪の山を歌っている。

【補説】

一番と同じく、主上のもとで詠じた歌を収めている。「雲ぬ」の多
義性を生かしつつ、主上の命で雪山が作られた内裏の春を楽しんで
いたようすがうかがえる。ただし、こちらもどの天皇の御代のこと
であるのかははっきりしない。

局の御簾に、人のさしたる

5 この春や帰らで雁も花を見ん越路にまがふ雪のけしきに

【底本】

つほねのみずに人のさしたる

この春やかへらてかりもはなをみんこしちにまかふゆきのけしき
に

【通釈】

(周防内侍の)局の御簾に、ある人が(手紙を)さした。

この春には、(渡り鳥なのに北へ)帰らないで、雁も花を見るだろう。
越路と見あやまる雪(のような桜)のありさまのために。

【参考歌】

東の壺に向かひて住ませ給ふに、入らむとすれば、入るべき口に、まことに牛立ちたり、具したりし侍よしのりして退けさせて、具し聞こえたる若き女房たちは怖ぢ騒ぎ給ふに、密かに入りて、萩の下にこの鹿を立て置きて、帰るとて、御格子を引き見れば、守ると掛けざりければ、引き上げられたる格子のもとに、人人十人ばかり寝たり、母屋に、殿はいとあらはに御几帳うち上げて寝させ給へり、をかしうて、扇して端を高やかにうち叩きて、「いみじうも大殿籠りたるかな」と申しかけて、急ぎ帰りぬ、寝たる人人、寝くたれて起きあがりて騒ぐ、御返し、曙に宮の御簾にぞさされたりし

①しがらみにいつしか来なむと思ふには萩におきたるつゆやとも言はず
(四条宮下野集・一一一・藤原師実)

②この春や思ひひらけて九重の雲の桜我がものと見む
(頼政集・五七九)

③春霞立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みやならへる
(古今集・春上・三一・伊勢)

④人ならばとはましものを散りぬべき花を見捨てて帰る雁がね
(堀河百首・帰雁・一九七・藤原頭季)

⑤桜咲く山辺をすぐる雁がねは越の白嶺を越えぬと思ふ
(林葉和歌集・帰雁をよめる歌林苑・八七)

【語釈】

○局の御簾に、人のさしたる：周防内侍の局の御簾に、ある人が文を差し挟んだ。本詠の作者は不明。ここでの「局」は、大内裏もしくは里内裏に割り当てられていた周防内侍の部屋を指す。「御簾」は母屋と廂の間の間に目隠しとして垂らすすだれのこと。①の返歌は、おそらく下野が鹿を立てた所に咲く萩につけて御簾に挿された。本詠も、歌をつけた桜の枝が局の御簾に挿されていた。三九番歌では、

枯れた葵に歌が書きつけられている。○この春や…この春には。この句を用いる歌は少なく、近時には、今春から昇殿を許された頼政を言祝いだ②のみ。○帰らで雁も花を見ん…北へ渡って行くはずの雁も、帰らないで桜を眺めるだろう。「雁」は、秋に北からやってくる春に帰って行く渡り鳥で、その行く先は越の国とされた。「越」と

「来し」の掛詞がしばしばともに詠まれる。春(帰雁)と秋(初雁)を代表する景物の一つ。和歌では「帰る雁」(Ⅱ春になつて北国へ帰って行く雁)は春の景物の定番で、③や④に詠まれるように、雁は春が来ると美しい花を見捨てて、雪深い北国へ帰っていくものとされてきた。本詠は、「帰る雁」の本意を生かしつつ、下の句で桜を雪に見立て、満開の桜があたかも雪国かと思あやまらせるので、雁も北に帰らないで花を見るだろうと詠む。○越路にまがふ雪のけしきに：雪深い越路と見あやまらせる雪のような桜のために。「越路」は、越の国(越前・越中・越後の三国あたりの地)や、越の国へと至る路をさす。⑤で俊恵は、桜が満開の山を越えていく雁は、まるで白雪のつもった越路の山を越えたと思うだろうと、満開の桜を越路の雪に見立てていて、本詠と発想が近い。

【補説】

満開の桜が題材とされ、しだいに春が深まっていく配列となっている。五・六番の贈答歌が生み出された場合は、掌侍として内裏に仕える周防内侍の局であり、一番から引きつづいて、宮廷における詠が選り入れられている。

返し

6 ふり捨ててえもゆきやらじ帰る雁花に留めぬ心なりとも

【底本】

返し

ふりすてゝえもゆきやらしかへるかりはなにとゝめぬ心なりとも

【通釈】

(周防内侍の)返歌

(この素晴らしい桜を)置き去りにして、どうしても(越路へは)進んではいけないでしょうよ。(北へ)帰る雁が花に対する情趣を解さないような心もちであるとしても。

【参考歌】

①ふり捨てて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖は濡れじや

(源氏物語・賢木・一四〇・光源氏)

②ふり捨てて雲井はるかに鈴鹿山かからんものと思ひかけきや

(弁乳母集・六三)

③ふり捨てし雪げの空をながめつつ我は我ともうらみつるかな

(経信集・一七五)

④雁がねの春たちかへる越路には都にまさる花や咲くらん

(堀河百首・帰雁・二〇二・源頭仲)

【語釈】

○返し：周防内侍の返歌。○ふり捨てて：桜の花を見捨てて。本詠も五番歌と同じく、春になると花を見捨てて帰っていく帰雁の本意を活かす。「ふり捨つ」は、①や②のように「ふり」を「鈴」の縁語として詠むことが多い。しかし、③の「ふり捨つ」が「雪」の縁語「降り」となるように、本詠では初句の「ふり」と二句の「ゆき」とが響きあう。それによって、満開の桜の素晴らしさに、贈歌で詠まれた越路の雪深さが重なる。○えもゆきやらじ：雁が帰っていく越路へは、どうしても進んでいけないでしょうよ。○帰る雁花に留めぬ心なりとも：北へ帰る雁が、花の美しさに心を動かされないとしても。贈歌に歌われるように、雪に見紛う満開の桜ならば、雁も見捨てかねるだろうと歌う。これに対して、『堀河百首』の「帰雁」題による④は、春になって雁が帰っていく越路にはきつと都よりも素晴らしい花が咲いているのだろうと、雪を花に見立てている。

二条院にて、人人端に月見てゐあかすに、寄り臥して「枕をがな」と忍びやかに言ふを聞き、藤大納言忠家「これを御枕に」と腕を御簾の下よりさし入れ給へりければ

【底本】

7 春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ
二条院にて人／＼はしに月みてゐあかすによりふしてまくらをかなとしのひやかにいふをきよて藤大納言忠家これを御まくらにとてかゝるなをみすのしたよりさしいれたまへりければ
春の夜のゆめばかりなるたまくらにかひなくたゝむなこそをしけれ

【他出】

○『千載集』雑上・九六四

二月ばかり月明き夜、二条院にて人人あまたゐあかして物がたりなどし侍りけるに、内侍周防寄り臥して「枕をがな」と忍びやかに言ふを聞き、大納言忠家「これを枕に」とて腕を御簾の下よりさし入れて侍りければ、よみ侍りける

周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たん名こそ惜しけれ

と言ひ出し侍りければ、返事によめる 大納言忠家

契ありて春の夜深き手枕をいかがかひなき夢になすべき

○『定家八代抄』恋二・九五四

二月ばかり月明き夜、二条院にて人人物がたりなどし侍りけるに、周防内侍寄り臥して「枕をがな」と言ふを聞き、大納言忠家「これを枕に」とて腕をさし入れて侍りければ

周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たん名こそ惜しけれ

返し 大納言忠家

契ありて春の夜深き手枕をいかがかひなき夢になすべき

○『新時代不同歌合』卅八番 左・二二三 *右方は平政村

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ
契りしにあらぬつらさも逢ふことのなきにはえこそ恨みざりけれ

住みわびて我さへのきのしのぶ草しのぶかたがた繁き宿かな

○『百人秀歌』・六九

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ

○『百人一首』・六七

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たん名こそ惜しけれ

○『女房三十六人歌合』右・一八 *左方は中務

契りしにあらぬつらさも逢ふことのなきにはえこそ恨みざりけれ

恋わびて眺むる空のうき雲や我が下もえの煙なるらん

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たん名こそ惜しけれ

【通釈】

二条院(章子内親王)のもとで、人々が部屋の端のあたりで月を見て夜を明かしているときに、周防内侍がものに寄りかかって横になって「枕がほしいわ」と、そつと言ったのを聞いて、藤大納言忠家が「これを枕に(なさつてください)」と自身の腕を御簾の下から差しいれなされたので。

春の夜の夢のような(はかない戯れの)手枕のために、(恋仲である)とつまらなくも立つ浮き名が残念ですよ。

【参考歌】

後冷泉院みこの宮と申しける時、二条院はじめて参らせ給ひけるを見奉ることやありけむ、よみ侍ける

①春ごとの子の日は多く過ぎつれどかかる二葉の松は見ざりつ

(後拾遺集・雑五・一〇九九・出羽弁)

②枕だに知らねばいはじ見しままに君語るなよ春の夜の夢

(新古今集・恋三・一一六〇・和泉式部)

③見やしつる見ずやありつる春の夜の夢とて何を人に語らむ

(夜の寝覚・巻三・四四・帝)

④春の夜の夢のうき橋とだえして嶺にわかるる横雲の空

(新古今集・春上・三八・藤原定家)

⑤わくらばにまれなる人の手枕は夢かとのみぞあやまたれける

(新勅撰集・恋四・九二九・藤原恒女)

⑥物をのみおもひ寝覚めの床のうへに我が手枕ぞありてかひなき

(和泉式部続集・一四一)

⑦折りけむことは夢にてかぎりてよさても逢ふてふ名こそ惜しけれ

(後拾遺集・雑二・九四四・四条宰相)

【語釈】

○二条院にて、人人端に月みて居あかすに：二条院(章子内親王)のもとで、人々が部屋の端のあたりで月を見て夜を明かしたときに。

①の詞書や、『今鏡』(藤波の上)で中宮威子の皇女たちについて述べたなかに「この後の生みたてまつり給へる姫宮、章子内親王と申す。二条院と申す。この御事なり。後冷泉院東宮におはしましし時、参らせ給ひて、永承元年七月に中宮に立たせ給ふ」とあるように、「二条院」とは後冷泉天皇中宮の章子内親王をさす。章子内親王(万寿三年(一一〇二六)一一月九日〜長治二年(一一〇五)九月一七日八〇歳)は、後一条天皇の第一皇女。一品宮とも。母は藤原道長女の威子。長暦元年(一一〇三七)一一月に着裳、皇太子親仁親王の妃となる。寛徳二年(一一〇四五)親仁親王受禪にもなつて女御。承保元年(一一〇七四)に女院号を受け、二条院と号す。『栄花物語』根合巻には、後冷泉天皇とともに歌合に出御とある。○藤大納言忠家：藤原忠家(長元六年(一一〇三三)〜寛治五年(一一〇九一)一一月七日 五九歳)は、藤原長家二男、母は従三位源懿子。子に俊忠。

孫に俊成。康平七年（一〇六四）一〇月一三日に正二位、承暦四年（一〇八〇）八月一日に大納言。寛治四年（一〇九〇）九月二五日に出家。『後拾遺集』以下の勅撰集に四首入集。『宇治拾遺物語』（巻三の二）には、女房と契りを交わそうとしたときに、高らかに鳴った女の放屁に辟易して出家を思いたつものの、数歩のうちに思いとどまるという逸話が見え、忠家の色好みとユーモアがうかがえる。名筆（柏木切・二条切・仁和寺切など）としても知られる。○春の夜の夢ばかりなる手枕に：春の夜の夢のように、はかない戯れの手枕のために。「春の夜」は、夜が長い秋に対して、冬を通過しだいに夜が短くなつていくイメージをもつ。本詠では「夢」と組み合わせられることによつて、春の夜の幻想的な「はかなさ」が強調されるとともに、忠家が深い考えもなく腕を差し入れてきた想いの浅さもあらわす。思いがけず契つた男におくつた②にも、はかない逢瀬を暗示させるものとして「春の夜の夢」が用いられている。実事なき逢瀬の後に帝からおくられた③に、はかない逢瀬の喩えとして「春の夜の夢」が用いられていたのに対し、つづく本文では女君が「つひに、あひなく、名さへ流れぬべきこそ、今まで長らへにけるさへ悔しけれ」と漏らしている。春の夜のはかなさを結実させた作品としては、新古今の代表歌とも言うべき④がある。「手枕」は、腕を枕の代わりにすること。「手枕」の夢のような儂さを歌つた⑤のような歌も早くから詠まれる。○かひなく立たむ名こそ惜しけれ…つまらなくも立つ浮き名が残念ですよ。「かひなく」に「腕（かひな）」が響く。先行例として、「ありて甲斐なき」に「腕」が重ねられ、ひとり思いわびつつ眠る床で自分の腕を手枕にしてもつまらないと歌う⑥がある。「かひなく立たむ名」は、実際にはどうというわけでもない二人が恋仲だと噂になってしまうこと。「名こそ惜しけれ」という句は、本詠と同じく恋仲でもないのに浮き名が立つことを厭う⑦など、『後拾遺集』あたりから用例が見えるようになる。

【補説】

七・八番歌は、後冷泉天皇がその後であつた章子内親王のもとを訪れた折のもの。後冷泉以降四代の天皇に仕えた周防内侍の歌歴において、初期の作となる。家集の大部分が白河天皇・堀河天皇の御代の詠作を収めていることからすると、本詠は周防内侍の歌人始発期における表歌であつたとみられる。

と言ふを聞き給ひて、

8 契りありて春の夜深き手枕をいかがかひなき夢になすべき

とのたまひしこそ、いとをかしかりしか。

【底本】

といふをききたまひて

ちきりありて春のよふかきたまくらをいかかひなきゆめになすへき

とのたまひしこそいとをかしかりしか

【他出】

○『千載集』雑上・九六五（前歌【他出】参照）

と言ひいだし侍りければ、返事によめる 大納言忠家

契ありて春の夜深き手枕をいかがかひなき夢になすべき

○『定家八代抄』恋二・九五五（前歌【他出】参照）

返し 大納言忠家

契ありて春の夜深き手枕をいかがかひなき夢になすべき

【通釈】

と言ふのを（忠家が）お聞きになつて。

前世からの約束があつて、春の夜ふけに（あなたに差し入れた）手枕を、どうしてつまらない夢にになってしまうのでしょうか。

と（忠家が）おっしゃったのが、たいそう面白いことでした。

【参考歌】

①契りありてこの世にまたはうまるとも面変わりして見もや忘れむ

(後拾遺集・哀傷・五六六・藤原実方)

②契りありて這ひかかるとも見ゆるかな薫や木ずゑの妹背なるらん

(散木奇歌集・薫・一二八六)

昔、男、あひがたき女にあひて、物語などするほどに、鶏の鳴きければ、

③いかでかは鶏の鳴くらむ人しれず思ふ心はまだ夜ぶかきに

(伊勢物語・五三段)

④おぼつかかな春の夜深きはなれ駒跡をたづねんかたも知られず

(散木奇歌集・一二三〇・二条太皇太后宮大式)

【語釈】

○と言ふを聞き給ひて…と、周防内侍が言うのを、藤大納言忠家がお聞きになって、お詠みになった歌。○契りありて…あなたと私の間には、前世からのお約束があつて。「契り」は、前世からの宿縁、約束のこと。「契りありて」を初句に置く例としては、そうなるべき宿縁があつてもう一度あの方が生まれてきたとしても、と亡き恋人を偲ぶ①が早く、その後、梢に絡む薫のような契りをおわした妹背に見立てた②など、用例が増えていく。○春の夜深き手枕を…春の夜ふけに、深く思うあなたへと差し入れた手枕を。「春の夜深き」には、「春の夜の夢」で表した時間的・心理的なかなさに対して、春の夜ははかないとあなたは言うけれど夜明けまではまだあるし、ちよつとした戯れではなくあなたへの深い想いから差し出した手枕なのだ歌う。③では、男は自分の思いの深さを夜の深さに重ねている。「春の夜深き」はあまり用例のない句で、少し後に二条太皇太后宮大式が、訪ねてくるだろうと思つていた俊頼がやつて来なかつた気がかりを詠んだ④のほかに数首が残るのみ。○いかがかひなき夢になすべき…どうしてつまらない夢にしてしまうのでしょうか。周防内侍詠を受けて、「かひなき」に「腕」を響かせている。

○このたまひしこそ、いとをかしかりしか…と忠家さまが歌をお詠みになったのは、たいそう面白いことでしたよ。

【補説】

『源氏物語』の「花宴」のなかで、光源氏は「朧月夜に似るものぞなき」と口ずさんだ女君を、抱き下ろすときに、

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふと歌った。

月の美しい春の夜にさしだした腕へ、即座に「かひなく」と返してみせた周防内侍に、忠家は自らを光源氏になぞらえて、あなたとの宿縁があつてさしだした夜深き手枕であると詠じたか。

忠家にごまでの思いはなく詠まれたのだとしても、周防内侍のほうが忠家詠の詞づかいや、やりとりが行われた月の美しい夜という状況から、自然と「花宴」を想起したのではなからうか。周防内侍詠に比べて評価されることの少ない忠家を載せた上で、「いとをかしかりしか」との評を添えたのは、優美な物語を彷彿とさせる場面が、思いがけず出来上がったことに心動かされたためとみておきたい。

また、『千載集』が『周防内侍集』七番の詞書きをほぼ踏襲しつつ、冒頭にわざわざ「二月ばかり」と添えたのも、「花宴」の二月二〇日過ぎという場を『周防内侍集』からくみ取ったか。

春日より掃りたりしに、右大弁通俊

9 いっしかと思はん人は告げてましとふひの野辺に若菜摘みきと

【底本】

かすかよりかへりたりしに右大弁みちとし
いっしかとおもはん人はつけてましとふひのゝへにわかなつみき

と

【他出】

○『言葉と歌集』雜上・二二二

春日にまうでて帰りぬと聞きて、周防内侍のもとへ遣はしけ

る 通俊卿

いつしかと思はん人は告げてましとふひの野辺に若菜摘みきと

返し 内侍

飛火野の雪間の水に袖濡れて摘みし若菜は誰がためぞは（二二二）

【通釈】

（周防内侍が）春日から帰ってきたときに、右大弁通俊（が詠み送ってきた歌）。

（早く逢いたいと）待ちかねて（私を）心にかけるような人ならば、知らせてくださったのでしように。（春日の）飛火の野辺で若菜を摘みましたよと（と、訪う日を告げて）。

【本歌】

今朝はしも思はむ人はとひてましつまなきねやの上はいかにと

（俊頼髓脳・四一一・和泉式部）

【参考歌】

①飛火野の雪げの水に袖濡れて摘みし若菜は誰がためぞは

此歌は、権中納言通俊卿春日より帰りととひたりける返事

と云云 （夫木和歌抄・雜八・二二五二七・周防内侍）

②いつしかと思ひしものを鶯の春立たずとやおとづれもせぬ

（道命阿闍梨集・二二一七）

③春日野のとぶひの野守いでて見よ今いくかありて若菜摘みてむ

（古今集・春上・一八・よみ人知らず）

正月七日、卯日にあたりて侍りけるに、「今日は卯杖つきてや」など通宗朝臣のもとより言ひに遣せて侍りければよめる

④卯杖つき摘まほしきはたまさかに君がとふひの若菜なりけり

⑤とふひ野ののべに木伝ふ鶯は都のほかに声ぞふるさぬ

（法成寺入道殿御集「冷泉家時雨亭藏本」・八四）

（後拾遺集・春上・三三・伊勢大輔）

【語釈】

○春日より帰ったりしに：周防内侍が春日から帰ってきたときに。

【他出】にあげた『言葉と歌集』二二二番の詞書は周防内侍が春日社へ参詣して帰ってきたとし、①の左注は通俊が春日から帰ってきたとする。「春日」は、大和国の歌枕で、現在の奈良市の奈良公園あたりのこと、または春日大社をさす。○右大弁通俊：藤原通俊（永承二年（一〇四七）～承徳三年（一〇九九）八月一六日 五三歳）は、太宰大貳経平二男、母は高階成順女。通宗の同母弟。伊勢大輔の孫。承暦四年（一〇八〇）に藏人頭、応徳元年（一〇八四）に参議、右大弁。大藏卿などを経て、寛治八年（一〇九四）に中納言、治部卿。白河天皇初期からの側近。和歌行事では主導的な役割を果たし、『後拾遺集』編纂の命を受けた。応徳三年（一〇八六）に『後拾遺集』奉献。当時、有力歌人として源経信や大江匡房がおり、勅撰集撰者として通俊の力量を批判されがちであった。しかし、白河天皇のもとで承保二年（一〇七五）『殿上歌合』の歌人、承暦二年（一〇七八）『内裏歌合』の右方講師をつとめたほか、寛治八年には前関白師実主催の『高陽院七番歌合』で各題一番右作者となるなど、さまざまな歌会・歌合に出詠。『後拾遺集』以下の勅撰集に二七集入集。本集の五八・六二・六六・七九番に歌がみえ、周防内侍とはかなり親しい間柄であった。○いつしかと：早く逢いたいと待ちかねて。人の訪れを待ちかねている②で、初句に用いる。○思はん人は告げてまし：私のことを心にかけてくれる人ならば、知らせてくださったんでしように。あなたは私を大切に思っていないから、帰京してもお知らせがないのだろうと、周防内侍を恨む風情。私を愛してくれている人ならば、ひどい霜の朝こそ見舞ってくれるだろうにと、

音信のない男を恨む和泉式部詠は、句の展開・内容が本詠と近く、これを下敷きとして本詠が詠まれた。〇とふひののべに若菜摘みきと：春日の飛火の野辺で若菜を摘みましたよと、訪う日を告げて。「訪ふ日」と「飛火」、さらに「述べ」と「野辺」を重ねて、春日の野辺で若菜を摘んだよ、と訪う日を告げてくれるのだろうに、と倒置法を使って歌っている。「飛火の野辺」は、春日野の一角を指している、東大寺、興福寺、春日大社があるあたり。『古今集』には、飛火の野辺で若菜を摘もうとすることを詠んだ③がある。本詠と同じく「飛火」と「訪ふ日」を掛けた歌が、通俊の兄通宗へ祖母伊勢大輔が送った歌④にみえる。「飛火の野辺」が歌にしばしば見えるようになるのは周防内侍以降で、先行例としては⑤に類句がある。⑤は音信がないことを咎めた彰子詠に返歌したもので、この歌の初二句は、子の日にかけて若菜摘みをする飛火野ではありませんが、「訪ふ日」のことを申しあげようと思っておりましたよ、と歌う。

【補説】

本詠は贈答歌であるにもかかわらず、周防内侍本人の歌を欠いた形で贈歌だけが収められている。書写時に欠脱したものか、あるいは、本集が清書本ではなく、草稿や草稿の資料のような不完全なもので、あとから内侍自身の歌を書き入れようとしたものの、なんらかの理由でそのままになってしまったものか。

欠けた理由は定かでないものの、『四条宮下野集』や『祐子内親王家紀伊集』のように歌が欠けたままで伝存する場合もある。

例ならぬ事ありて里にあるに、夜中ばかりに門をおどろおどろしく叩きて「二位中将殿より御文」と言ふに、驚きて見れば、雪降りて月いとあかし

白妙の雪を月とぞまがふめるともなる今宵何にたとへむ

返し

(二行分空白)

(四条宮下野集・二五)

七条宮の四条殿、故小弁が集をかりて、「埋み火」と言ふところに歌はなきに、かく書きつけられたりし

もろともに君もはかなく消えにけり埋み火いかで煙たちけん

(祐子内親王家紀伊集・二五)

本詠に対する周防内侍の答歌は、『言葉と歌集』と『夫木和歌抄』に掲載されている。そこで、「他出」にあげた『言葉と歌集』の周防内侍詠(二二三番歌)の注釈等を以下に付す。

【二二三番歌通釈】

返歌 周防内侍

飛火野のむら消えした雪どけ水に袖を濡らして、(私が)摘んだ若菜はどなたのためでしょうね。

【二二三番歌参考歌】

①君がため若菜摘むとて春日野の雪間をいかに今日はわけまし
(和泉式部統集・四四)

②君がため春日の野辺の雪間わけ今日の若菜をひとり摘みつる
(宇津保物語・蔵開き中・七六〇・孫王の君)

③君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ
(古今集・春上・二一・光孝天皇)

④春日野の雪間をわけて生ひ出でくる草のはつかに見えし君はも
(古今集・恋一・四七八・壬生忠岑)

【二二三番歌の解釈】

公的なものか私的なものかわからないが、春日社参詣をした周防内侍に対して、通俊は彼女の帰京を待ちかねたように本詠を詠みおくれた。音信のない恋人を恨むようすの和泉式部詠を下敷きとして、帰京のお知らせがないのは私を軽んじているからだろうと怨じて

みせる通俊に対し、周防内侍は下の句で「摘みし若菜は誰がためぞは」と切り返している。

「飛火野の雪間」で若菜を摘むという表現は、贈歌の「飛火の野辺」を受けつつ、春日野で雪間をわけて若菜を摘むのは「君がため」だと初句で明示した①や②あたりを響かせたものであろう。あるいは、若菜を摘むのはあなたのためだと歌う著名な③や、「春日野の雪間をわけて」という歌い出しで春日祭をきっかけとした恋を詠んだ④に学んだとも考えられる。いずれにせよ、周防内侍詠は先行作を用いつつ、男の恨み言に即応してみせた。

本集に収められている通俊との贈答を見渡すと、非常に心やすい間柄であったことがうかがえる。しかし、それは実際に恋仲だったというよりは、ともに白河天皇に近侍する内侍と蔵人という職掌上の近さが作用したものの。

内の御前のおはします朝餉の御簾に、桜の作りたる枝に
鞆をつけてささせ給へりしかば

10 のどかなる雲ゐは花も散らずして春のとまりとなりにけるかな

【底本】

うちの御前のおはしますあさかかれるのみすにさくらのつくり
たるえたにまりをつけてささせたまへりしかば

のどかなるくもゐは花もちらすしては春のとまりとなりにけるかな

【他出】

○『新勅撰集』春下・一一九

堀河院御時、朝餉の御簾に、桜の作り枝に鞆を付けてささせ
給へりけるを見てよみ侍りける 周防内侍

のどかなる雲ゐは花も散らずして春のとまりとなりにけるかな
○『言葉と歌集』雑上・二四八

朝餉の御簾に、桜の作り花に、鞆をつけてささせ給ひたりければ 周防内侍

のどかなる雲ゐは花も散らずして春のとまりとなりにけるかな

【通釈】

主上がいらつしやる朝餉の間の御簾に、作りものの桜の枝に鞆をつけて挿させなさっていたので。

長閑やかな宮中では（桜の）花も散らなくて、春の行きつくところとなったのだな（と思われましたよ）。

【参考歌】

後三条院かくれおはしまして後五月五日、一品宮の御帳に昌蒲ふかせ侍りけるに、桜の作り花の挿されたるを見てよめる
① 菖蒲草ねをのみかくる世の中にをりたがへたる桜花かな

（金葉集三奏本・雑下・五九七・藤原有佐）
② のどかなる雲ゐの花の色にこそ万代ふべき春は見えけれ
（増鏡・むら時雨・一五一・中務尊良親王）

③ 今日も又花みて暮らす旅人の春のとまりは桜なりけり
（為仲集・八）

④ 花は根に鳥は古巢にかへるなり春のとまりを知る人ぞなき
（千載集・春歌下・一二二・崇徳院）

⑤ 年ごとに紅葉葉ながす竜田河みなどや秋のとまりなるらむ
（古今集・秋下・三一・紀貫之）

⑥ 立ちなるる我が身老い木のもとごとくにさても朽ちせぬ名やとまりなん
（明日香井和歌集・百日歌合 蹴鞠・七二二）

⑦ 春を惜しみ折りつる花も九重に思ふあまりの色は添へけり
（明日香井和歌集・一三二三・順徳天皇）

【語釈】

○内の御前のおはします朝餉の御簾に、主上がいらつしやる朝餉の間の御簾に。「内の御前」を『新勅撰集』は堀河天皇とするが、周

防内侍は四代の帝に仕えており、いずれの帝の御代であるか定めがたい。「朝餉」は、朝餉の間のこと。朝餉の間は、天皇が食事を摂る部屋で、清涼殿の西廂、台盤所の北にある。『讃岐典侍日記』には「内の大臣殿、朝餉の御簾まきあげて、長押の上に殿さぶらはせ給ふ」とある。○桜の作りたる枝に鞠をつけてさせ給へりしかば…作りものの桜の枝に鞠をつけて挿させなさっていたので。「作りたる枝」は、金・銀などで作った作りものの枝で、献物や贈り物にされた。①の詞書では、一品官の御帳に作りものの桜の枝が挿してあったことがみえる。○のどかなる雲ぬは花も散らずして…長閑やかな宮中では桜の花さえ散ることがなくて。「雲ぬ」には、大空と、宮中が重ねられている。「花も散らず」は、御簾に挿してあったのが「桜の作りたる枝」だったので、造花が散らないのことに寄せて、天下太平な主上の御世には、花も散り乱れることがないのだとする。さらに「のどかなる」「春のとまり」を詠み入れることで、一首全体に太平な世を言祝ぐ意があらわとなる。本詠と初二句が共通する②も御代を言祝ぐ歌。○春のとまりとなりにけるかな…ここは春の行きつくところとなったのだなあ。作り枝の花は散らないことから、それが挿された宮中に穏やかな春がとどまりつつつづけると歌われているが、そこには太平の世を慶する思いがこめられている。「とまり」は、「果て、行きつくところ」のこと。「春のとまり」の先行例は、旅人から導かれた「泊まり」を詠みこんで、春の宿は桜なのだと言んだ③のみ。その後も用例は少なく、崇徳院詠④が著名。「くのとまり」と季節の宿りを詠むものとしては秋歌が先行し、「秋の果つる心」を詠んだ⑤などがある。本詠は詞書に「鞠をつけて」とある部分を歌に生かして、「とまり」に「鞠」を隠し題のように詠み入れている。これと同じく「とまり」に「鞠」を隠した例として⑥が残る。また、雅経が「八重桜の枝に鞠をつけて」献上した際の歌に、順徳天皇が返した⑦の第四句「思ふあまり」にも「鞠」が隠されている。

【補説】

詞書に記された「鞠をつけて」という描写が、和歌のなかで隠し題のように機能している。このように本集の詞書は、一見饒舌なように見て無駄がない。詞書を執筆するにあたって、歌の理解ということに重点を置いて周到に文章が練られている。

本集から勅撰集へと選び入れられた歌々の詞書を見渡すと、大きな改変は行われず、ほとんどが家集のままの形で取り込まれている。著名歌人の家集が尊重されたということはあるが、一方で、撰者による再調整の必要がないくらい巧みにまとめ上げられていたということでもあろう。

高陽院殿の歌合に 桜

11 山桜散る木のもとにいくたびか惜しむ心のゆきかかるとらん

【底本】

かやめんとこのうたあはせに さくら

山さくらちるこのもとにいくたびかをしむころのゆきかゝるらん

【他出】

○『千載集』春下・八一

寛治八年、前の太政大臣の高陽院の家の歌合に、桜をよめる

内侍周防

山桜惜しむ心のいくたびか散る木のもとにゆきかかるとらん

○『高陽院七番歌合』桜・五

三番 左勝 周防内侍

山桜惜しむ心のいくたびか散る木のもとにゆきかへらむ

右 頭綱朝臣

花ゆゑにかからぬ山はなかりけり心は春の霞ならねど

右の歌の「かからぬ山」といふ事は中頃の歌にて、みな人

知りたる歌なり、霞はかかる詞詠まれてやあるべからん。
おぼつかなければ左の勝ちとや申すべからん。

○『後葉和歌集』春下・五五

京極前太政大臣家歌合に 周防内侍

山桜惜しむ心のいくたびか散る木のもとにゆきかへるらん

○『袋草紙』・四四四

賀陽院七番歌合 寛治八年八月十九日 判者経信卿

三番 同

勝 周防内侍

山桜惜しむ心のいくたびか散る木のもとにゆきかへるらむ

頭綱朝臣

花ゆゑにかからぬ山ぞなかりける心は春の霞ならねど

「かからぬ山」といふ事、中頃の歌なり。皆人知れり。また霞は「かからぬ」とは詠まれてやあらん、おぼつかなし、とて負く。

○『袋草紙』・六六八

桜を得て落花を詠める歌

賀陽院歌合 左勝 周防内侍

山桜惜しむ心のいくたびか散る木のもとにゆきかへるらむ

【通釈】

『高陽院七番歌合』にて 「桜」（題で詠んだ歌）

山桜が木のもとへ散りゆくたびに、いったい何度、（花を）惜しむ心が（木のもとへ）行きかけているのだろうか。（まるで雪のような花びらが、しきりに散り掛かっているように）

【参考歌】

①山桜散る木のもとには立ち憂くてやすむとなしに日をくらしつる

（唯心房集・二二）

②春深くなりぬと思ふを桜花散る木のもとはまだ雪ぞふる

（拾遺集・春・六三・紀貫之）
③唐錦色みえまがふ紅葉葉の散るこのもとは立ち憂かりけり

（後拾遺集・秋下・三六〇・平兼盛）

④極楽にゆきかかるとも見ゆるかな空より花の降る心ちして

（統詞花和歌集・物名・聯歌・九四七・前中宮の越後／相円法師）

【語釈】

○高陽院殿の歌合に：『高陽院七番歌合』にて。寛治八年（一〇九四）八月一九日に、藤原師実が自邸で催した歌合。『今鏡』（藤波の上）に「昔にも恥ぢぬ御遊なるべし」と記された撰閲家の催し。詠者は、左方が女房七人（中納言・筑前・周防内侍・讃岐・信濃・紀伊・摂津）、右方が男七人（藤原通俊・大江匡房・藤原頭綱・藤原正家・藤原行家・頼綱・源俊頼）。題は、春桜・夏郭公・秋月・冬雪・祝。判者は源経信。○山桜散る木のもとにいくたびか：山桜が木のもとへ散りゆくごとに、幾度も。「山桜」は山に咲く桜で、咲くのが遅いとされる。「幾度」と、桜の花びらが散り「行く度」とが掛かる。本詠と初二句が共通する①は、やはり山桜の落花の素晴らしさに心引かれていることを歌う。桜の花が散る根元は春が深まっても雪が降っているようだ、と落花を雪にたとえて詠ずる②や、季節は異なるものの、紅葉が散り積もった木のもとから立ち去りがたいことを詠じた③あたりと発想が近い。家集以外は「山桜惜しむ心の」となっていて、二句と四句を入れ替わっている。この入れ替えについては、補説参照。○惜しむ心のゆきかかるとも：散りゆく桜を惜しむ心が、いったい何度そこへ引き寄せられているのだろうか。桜を思う心が山へと「行きかかる」と、「雪かかると」ように桜が散っていることが重なる。④の連歌では、前中宮の越後が阿弥陀講に雪が降ったことから、極楽に雪がかかっているかのような素晴らしい様子に極楽に行きかけたと詠んだのを受けて、相円法師が前句の「雪」を散華に見立てている。出詠時には歌合本文にあるように、五句は「ゆきかへ

るらむ」であった。この表現だと「山桜を惜しむ心が何度も行ったり来たりした」ことは言えても、落花が雪のように散りかかっていることは表せない。家集や『千載集』が用いる「ゆきかかるとしたほうが、より豊かに詠歌空間を演出できる。

【補説】

家集が「山桜散る木のもとにいくたびか惜しむ心の」とするのに対し、歌合証本にみえるように、元々は「山桜惜しむ心のいくたびか散る木のもとに」という表現であった。いずれも、「山桜を惜しむ心が桜のもとに幾度も引き寄せられる」という大意は共通する。

家集は「山桜散る木のもと」と詠み出し、絶えず花が散りゆくさまを現出させ、あかず惜しむと、雪のごとく散る花をさらに重ね合わせたあたりは幻想的で美しい。

これに対して、「山桜惜しむ心」と歌い出すことによって、歌の中心となる心情がまず明かされた上で「景」の描写を下の句へと、なだらかに読み下していく構成がとられている。一首の意味はとりやすいが、その一方で、家集のように心情と景とが重層的に響き合う幻想的な空間は立ち上がってこない。周防内侍は家集収録にあたって、より幻想的な表現へと歌ことばの改訂を行ったのであろう。

第五句が家集と共通しながら、二・四句は歌合本文のままとしている『千載集』の表現は、詞の滞りなくなだらかに流れていくところに良さをみいだして、もとのままにしたと考えられる。ただし、第五句に関しては、語釈にも述べたように改稿後のほうが表現に膨らみが出ることから、家集の表現をとったとみておきたい。

〔付記〕翻刻を許可してくださった 公益財団法人 冷泉家時雨亭 文庫に深謝申し上げます。